〈資　　料〉

八尾物語

――地域づくりの可能性

東郷　　久

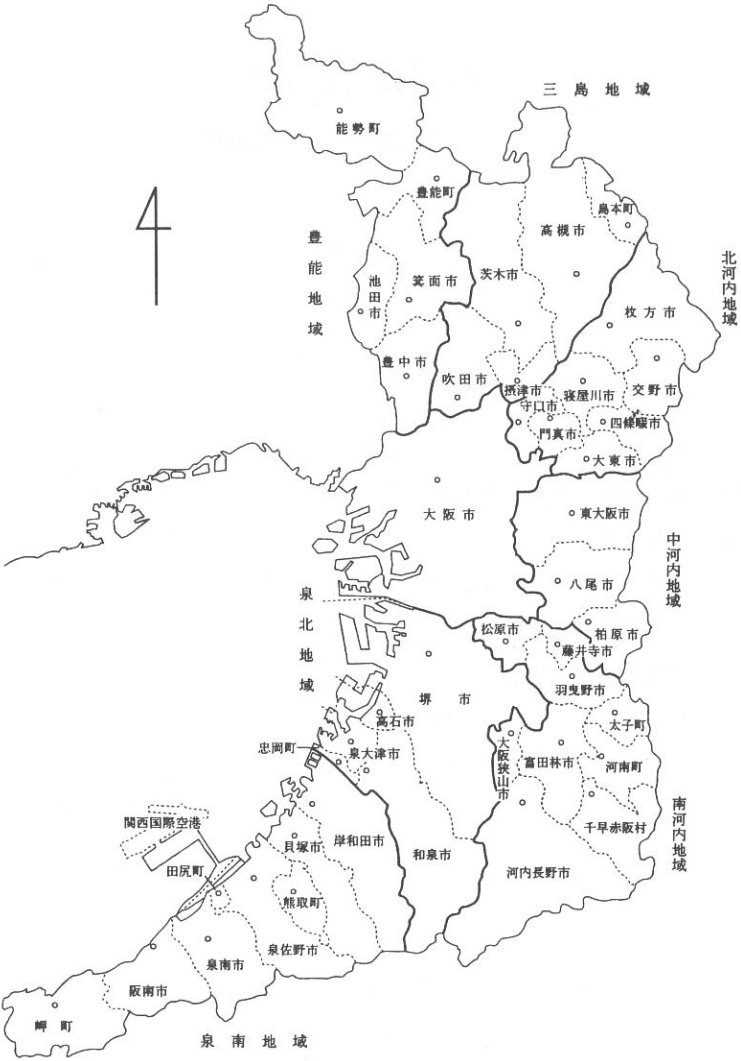
目　次

はじめに－地域づくりをめぐる経過
1．地域の成り立ちと地域的資源
＊　文献と資料　　（以上、本号）
2．地域づくりのネットワーク　　（以下、次号）
3．産業の地域的集積
4．地域の福祉と生活
5．地域づくりにおける地域的循環
6．地域的循環と自治体行財政

はじめに－地域づくりをめぐる経過

八尾市は、大阪府、大阪市の東側にあって大阪市の平野区に接続し、奈良県との県境を南北に走る生駒山系の西側に位置し、北側の東大阪市、南側の柏原市とともに中河内地域の１都市である（別図）。瀬戸内海気候区に属して気候は温暖であり、東部には生駒山麓があって自然環境に恵まれた地域となっている。人口は約27万3,000人、高齢化率は約21％（ともに2008年現在）の中規模都市である。

別図　大阪府下市町村と八尾市



八尾市域は、大阪市東部、東大阪市とともに中小企業が集積する東大阪地域の一画である。従業者数でみた場合、中小企業中心の製造業が３分の１を超え、金属製品、一般機械器具、プラスチック製品、電気機械器具などがその主な業

種である。しかし、それだけでなく、戦後の合併によって東部に農業地域を抱え、中心地は市街地として発展している。中小企業の集積地、農業地域、市街地が混在した特色ある地域である。

ここで、現在全国的な潮流となっているまちづくりまたは地域づくり（以下では地域づくりという用語を使用）の観点から、八尾市域を対象にした調査、研究を冊子や単行本で概観すると、それは次のような経過をたどっている。

地方分権一括法が施行された2000年以前には、八尾市域における地理、経済、歴史に関する問題が検討されている。

藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』（日本科学社、1961年）では八尾市側の山麓を含めた生駒山地の地形やこれに関連した営業が調査、検討されており、武部善人『河内木綿史』（吉川弘文館、1981年）ではかつて中河内地域を中心に拡大した産業である河内木綿の経済分析がなされている。

これらの個別的な研究を踏まえて、八尾市域の歴史がまとめられたのはこの時期の特徴である。棚橋利光『八尾・柏原の歴史』（松籟社、1981年）では古代から現代に至る八尾市の歴史がよく概括されており、八尾市史編集委員会編『八尾市史（近代）本文編』（1983年）では、経済、政治、文化にわたる歴史の検討が進められ、評価すべき八尾市史として作成されている。他方、この時期に作成された八尾地域づくり研究会編『フリースタンディング・シティ八尾』（自治体問題研究所、1987年）では、八尾市の地域づくりの調査研究に連なる先駆的な検討が行われている。

八尾市の地域づくりとこれに関連した調査研究が旺盛に取り組まれるのは、2000年前後から今日に至る時期である。

1997年に東大阪市で開催された第１回中小企業都市サミットが契機となり、八尾市域で中小企業の実態調査が取り組まれた。大阪府中小企業家同友会ほか編『八尾地域産業調査報告書』（1998年）、八尾市編『八尾市製造業に関する実態調査報告書』（1999年）などがそうであり、植田浩史編『産業集積と中小企業』（創風社、2000年）では八尾市を含む東大阪地域に集積する中小企業の特徴や地域づくりとの関連が初めて検討されている。

最近の中小企業をめぐる技術開発や異業種交流などの実態調査としては、日

刊工業新聞社編『大阪・八尾発50年後も輝く中小企業』（日刊工業新聞社、2008年）がある。

この時期におけるもう１つの特徴は、それらの中小企業の実態を踏まえつつ、八尾市『八尾市総合計画　やお未来・元気プラン21』（2001年）で「地域経営」が打ち出された点である。総合計画で地域づくりの政策的方向が出されたことに関連して、植田浩史『自治体の地域産業政策と中小企業振興基本条例』（自治体研究社、2007年）では、八尾市で2001年に制定された「中小企業経済振興基本条例」も含めて、条例制定と地域産業政策の全国的事例が紹介されている。また、八尾地域研究会編『八尾の地域づくり』（シイーム出版、2007年）では、地域づくりを意図した調査研究がなされている。

もとより八尾市域を対象にした調査研究は以上で取り上げたもの以外にも多数にのぼっており、この点では巻末の「文献と資料」を参照されたい。また、八尾市では、2011年度から新たな総合計画「やお総合計画2020～元気をつなぐまち、新しい河内の八尾～」が実施されつつある。

本稿は八尾市における地域づくりの可能性を探ることを意図したものである。地域づくりは、市場経済がグローバルに拡大しているもとで、それのみで完結するものではないが、ある範囲で、所得のみには依存しえない地域生活の豊かさを実現しうる今日的意義を有している。地域づくりが全国的に取り組まれ、今なお継続しているのは地域づくりにこのような意義があるからである。

地域づくりは地域の経済的文化的資源の活用がその基礎であるが、そのためには、八尾市域の地理、歴史、文化を踏まえることが必要であり、地域資源の具体的な内容がとらえられなければならない。他方で、地域づくりの主体である住民や地方自治体がそれらの地域資源にどのように働きかけてきたかという経過の検討や評価も必要になる。地域資源の存在や認識が自動的に地域づくりの進展に結果するわけではないからである。

1．地域の成り立ちと地域的資源

すでに触れたように、地域づくりは地域の経済的文化的資源の活用がその基礎であるが、その地域資源がどのように存在しているかをとらえるためには、八尾市域の地理、歴史、文化を踏まえることが必要である。ここでは、主に地理や歴史を概括し、日々目にするだけのものではない、いわば日常生活においては隠された、潜在的な地域資源の所在を考えることにしたい。

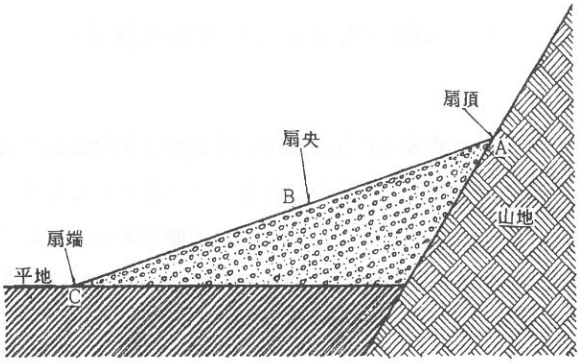
生駒山麓ー高燥斜面の扇状地

八尾市域は、気候の面では、大阪府下のほぼ全域がそうであるが、瀬戸内海気候区に属しており、年間平均気温は16.7℃、年間降水量は1,390㎜である（2003年）。とくに生駒山麓は日照が多く乾燥した高燥地域である（藤岡謙二郎編1961、齊藤恍三2008。以下、ここではこれらの文献を参照している）。

この高燥地域であることを示す１つがぶどうの栽培であり、それは同じく生駒山系の中部にあり、中河内地域に属する柏原市で、明治時代中期（19世紀末）以降から現在に至るまで、栽培と出荷が継続している。大阪府のぶどう生産は、1950年頃、山梨県の25％、岡山県の約10％についで全国の約10％を占めていたが、このうち中河内地域や南河内地域が面積で大阪府のぶどう生産の40％を占める状況にあった。

八尾市域側の生駒山麓はまた急峻な斜面であるが、これは生駒山系の断層が東側の奈良県側で隆起し、八尾市域側で沈降したからであるといわれている。山麓は図1のような断面図で表わされる。山麓は標高の扇頂（A）、中位の扇央（B）、下位の扇端（C）にまたがる斜面扇状地となっているが、ここでこの地形に即した生活が形成されてきたのが１つの特徴である。

図1-1　生駒山麓（八尾市域側）の断面図

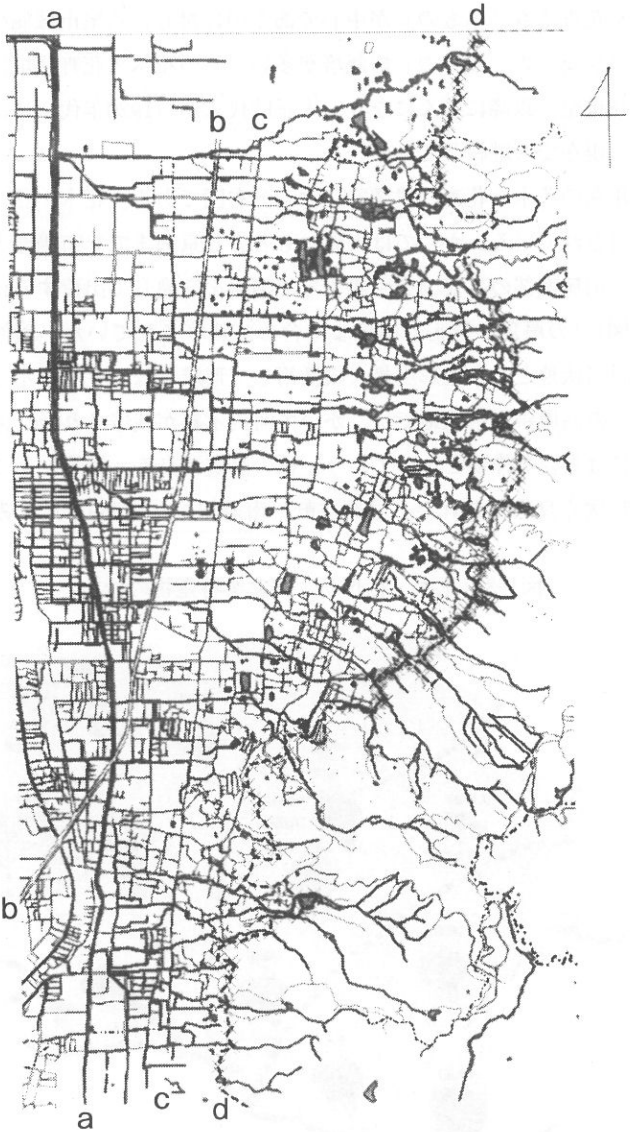


出所：齊藤恍三「高安山山麓の環境と里山保全」八尾市ほか編
『高安千塚シンポジウム資料編』2008年、p.43「図２」を借用。

この斜面扇状地には、扇頂も含めて、古くから集落がつくられている。これには、平地では急斜面に起因する洪水の被害がそれだけ大きく、これに対する対策をとらなければならず、安全な場所としてこの扇状地を選択したという歴史的な経緯が働いているといえる。この扇状地には、縄文、弥生時代に次ぐ３～７世紀の古墳時代後期につくられたとみられる、巨石による大規模な横穴式石室をもつ愛宕塚（あたごづか）古墳や高安千塚（たかやすせんづか）古墳群がみられる。

斜面扇状地であるため、里山に流れる谷川には奥行きが短く水量は少なく、水捌けが良すぎるという特徴があり、水不足に対する対策として溜池がつくられることになる。通常、農村地帯での溜池は谷川筋の最上部や、それが困難な場合はここでの扇状地にあたる台地の中央につくられるが、水捌けの良さを活用した花木・花卉（かき）栽培や木綿栽培との関係で、溜池は、図1-2のように、扇状地の上部までも含めて、谷川沿いにぶどうの房状につくられている。溜池は現在400ヵ所ほどにのぼる。

図1-2　生駒山麓の溜池分布



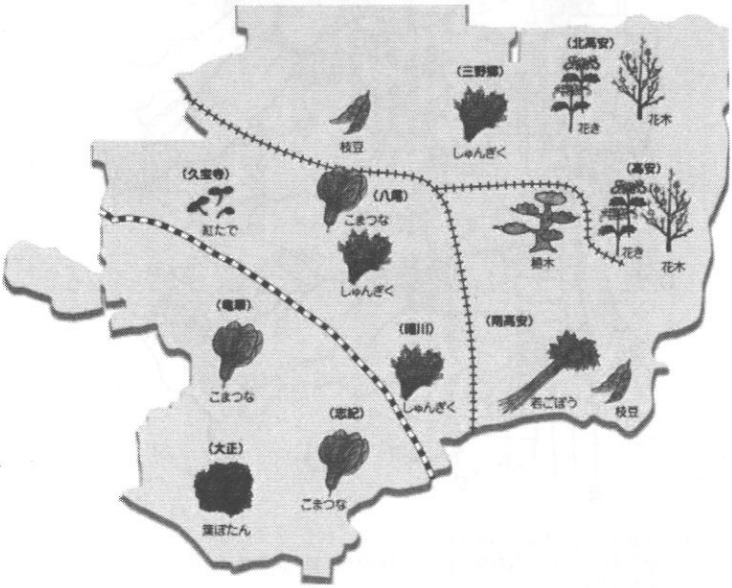
出所：齊藤恍三氏の作成。1971年時点。
注：ａは恩智川、ｂは大阪外環状線、ｃは旧高野街道、ｄ以西は八尾市。
　　溜池数は481カ所。

花木・花卉栽培をみると、奈良県側の生駒山麓は比較的緩やかな斜面であり、同じ花木や花卉でも「草もの」が中心であるのに対し、八尾市域側の急斜面では桃やツツジなどの「枝もの」の栽培が多い。この花木・花卉栽培は、江戸時代中期（18世紀）以降に盛んになり、大正時代末期（1920年代）には奈良県側に伝播し、現在でも継続している。

図３は現在の花木・花卉、農業特産物の分布図である。花木・花卉は傾斜扇状地で栽培されている。かつては大阪はもとより京都までを市場圏とし、大阪市内とこの山麓南部の高安山を手旗信号で情報を交換して出荷するほどに盛んであり、図1-1の扇頂を越えて山地まで含めて栽培されていた。溜池や花木・花卉は傾斜扇状地という地形を最大限活用して形成された生活を示している。

さらにこの高燥斜面扇状地では、かつて河内木綿が栽培された。河内木綿は、江戸時代には重要な作物となっており、綿の品質は良く、織物としても当時の松坂木綿に次ぐ良品とされた。貝原益軒『南遊紀行』（1689年）にみられるよ

図1-3　花木・花卉および農業特産物の分布



出所：八尾市資料（www.city.yao.osaka.jp10000002037.html、2010年12月）。

表1-1　大阪府における実綿(みわた)作付面積（明治時代以降）

単位：町、%

	1894	1902	1907	1916
大阪市	—	3.5(0.2)	2.0(0.3)	—
堺市				
西成郡	698.8(10.8)	34.0(1.5)	6.2(0.8)	0.5(0.9)
東成郡	794.4(12.3)	225.9(10.2)	27.7(3.5)	0.4(0.8)
三島郡	39.8(0.6)	13.5(0.6)	2.2(0.3)	0.3(0.6)
豊能郡	129.3(2.0)	12.4(6.6)	5.3(0.7)	—
泉北郡	693.3(10.7)	112.1(5.1)	2.6(0.3)	2.2(4.2)
泉南郡	140.1(2.2)	25.2(1.1)	15.4(2.0)	—
南河内郡	448.9(6.9)	79.0(3.6)	16.7(2.1)	—
中河内郡	3,255.4(50.2)	1,666.3(75.6)	689.9(88.3)	48.4(91.3)
北河内郡	278.7(4.3)	33.2(1.5)	13.3(1.7)	1.2(2.2)
合計	6,478.7(100.0)	2,205.1(100.0)	781.3(100.0)	53.0(100.0)

出所：山中 進『農村地域の工業化』大明堂、1991年、56ページ「表3-1」を借用。

うに、河内木綿は、当初、この生駒山麓を中心に栽培され、「山根木綿(やまねきめん)」と呼ばれた。高燥で水はけが良いこの地域が綿作に適していたのである。

その後、1704年に、奈良県に源流を発し、生駒山系の中部から中河内地域を北上していた旧大和川が、その中部から西向きに、現堺市に向かって付け替えられ、八尾市域を含む旧大和川流域で多くの新田が開発された。以下、河内木綿栽培に関説しておきたい。

この砂地の開拓新田で河内木綿の栽培が激増し、中河内地域は河内木綿の一大産地となって明治時代以降（19世紀末～20世紀初期）まで継続した。当時の若江郡（現東大阪市）において、実綿(みわた)の生産額が米の収穫金額を超えるという事例がみられた(山中 進1991)。表1-1は当時の綿作状況であるが、明治27(1894)年、中河内地域における綿作作付面積は大阪府のなかで50.2%を占めるという大きさであった。

この綿作が表1-1で明治35（1902）年以降に激減している事情は後に述べる。この扇状地の生活に関わって、ここで以下の点について触れておきたい。

それは溜池に生息する絶滅危惧種に指定されているニッポンバラタナゴである。溜池のいくつかに生息しており、現在、その保護活動が住民の手で取り組まれている。溜池をめぐって、タナゴと２種の水生動物との相互依存（内部循

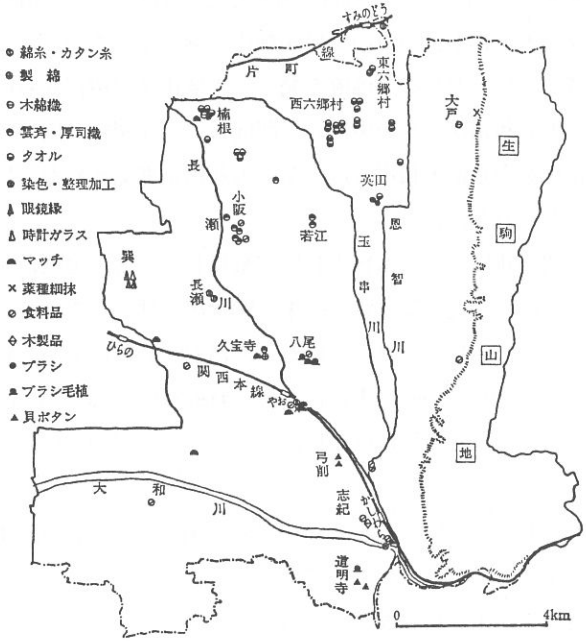
環)、溜池に流入する谷川の浄化に必要な森林の整備、および今ではあまり使用されなくなった溜池そのものの浄化を内容とする地域の環境保全(外部循環)が保護活動に必要な取組となっている。

産業の移転・集積と市域のモザイク性

花木・花卉にしても河内木綿にしても、それらの栽培と販売は大消費地、大都市に近接していることが1つの前提となっている。八尾市域における産業の集積も大都市・大阪市からの産業の移転がその背景となっており、次にその経過をみることにしたい。

産業が移転してくるのは大正時代から昭和時代前半（1900年代前半）以降で

図1-4　中河内農村における工場分布（明治39年）



出所：山中 進『農村地域の工業化』大明堂、1991年、p141「図7-1」を借用。大阪府内務部（1906）：『大阪府下会社組合工場一覧』
注：中河内農村には南河内の旧志紀郡を含む。

あるが、それ以前の工場分布は図1-4でみられるような状況である。明治39（1906）年当時の八尾市域では、ほとんど壊滅した河内木綿栽培に関連した綿糸や製綿が残存し、ブラシ関連業やマッチ製造がみられる程度である。八尾市域は農業、農村であり、農村労働力が活用されていたにすぎない。

さて、産業の移転についてであるが、その前段に次のような鉄道の開通があった。

JR 関西本線（当初は私鉄大阪鉄道、後に関西鉄道、その後日本国有鉄道）

八尾駅　明治22（1889）年

志紀駅　明治42（1909）年

久宝寺駅　明治43（1910）年

近畿日本鉄道大阪線（当初は奈良電気鉄道、後に大阪電気鉄道）

布施（東大阪市）－八尾間　大正13（1924）年

八尾－恩智間　大正14（1925）年

河内山本－信貴山口間　昭和5（1930）年

まず、大正3（1914）年に始まる第一次世界大戦の戦時景気のもとで、織物業、製油業、ブラシ工業などが大阪市より移転してきた。このうち織物業や製油業は、河内木綿やこれに関連する綿実絞油（こうゆ）の伝統が関係している。またブラシ（歯ブラシ）は、その後、八尾市域の特産品になるまでに拡大している。次に、昭和12（1937）年に勃発した日中戦争以後の軍需産業の拡大とともに、龍華村（当時）を中心に機械・金属工業が増大した。いずれも八尾市域における安価な労働力を求めてのことである。この結果、当時の八尾町－久宝寺村－龍華村を結ぶ市街地が形成されることになった。

第二次世界大戦後の高度経済成長期以降では、次のような特徴がみられる。高度成長を背景に、八尾市で1957年に「工場設置促進措置要綱」が策定されて産業誘致策がとられ、これを機に八尾市域への工場立地が拡大した。

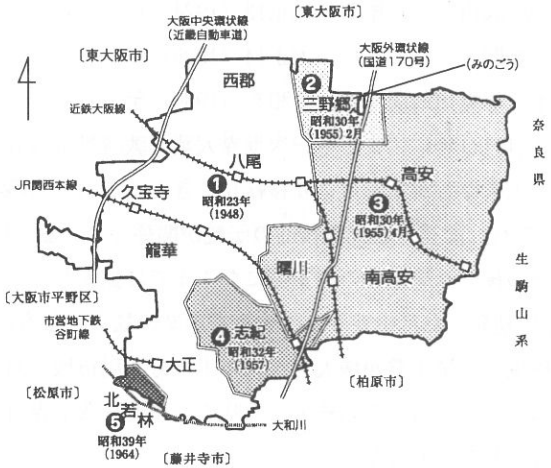
とりわけ1958年から61年にかけて急増し、産業移転は、この間年平均10社にのぼった。従業員で100～200人規模の工場と100人未満規模の工場がほぼ同数であるが、コクヨ、シャープ、ホシデンなどの大企業の立地もあった。産業にとっては大阪市内は過密で地価が高騰し、工場が周辺市町村へ拡散した。この

時期、八尾市において現在に連なる産業都市としての土台がつくられた。

この産業移転が高度成長期後にもさらに増大する、という経過をたどっている点は１つの特徴である。1970年代初頭の石油ショック後にも、70年代後半から80年代前半にかけた減量経営の時期にも工場数は増加している。工場数の増加テンポが停滞するのは80年代後半のバブル経済の時期であり、それが減少するのはバブル経済崩壊後の90年代後半以降の時期である。

産業の移転と集積は、1948年から64年にわたって継続した八尾市の合併、行政の規模拡大と符節を合わせて進行した。図1-5は八尾市の合併経過をみたものである。

図1-5　八尾市の合併経過（①～⑤）



出所：八尾市資料より作成。

合併の理念は、「大八尾市構想」であり、「住宅・産業・観光と三つが調和のとれた大田園都市」（1948年に就任した脇田幾松元市長の施政方針）である。この結果を2001年度末時点で産業の地域分布としてみると、表1-2のような状況である。

表1-2で産業を中心に八尾市市域を区分すると次のようにいえる。第1は八尾

表1-2　産業の地域別分布

2001年度末現在、単位：%

	人口(人)	事業所数(所)	工場数(所)	商店数(件)	農家数(戸)
八　尾	98,454(35.7)	5,251(36.4)	311(14.5)	1,575(45.6)	193(14.7)
西　郡	4,764(1.7)	707(4.9)	196(9.1)	74(2.1)	24(1.8)
久宝寺	11,653(4.2)	563(3.9)	89(4.1)	170(4.9)	49(3.7)
龍　華	33,968(12.3)	2,115(14.6)	481(22.4)	400(11.6)	85(6.5)
大　正	19,381(7.0)	1,757(12.2)	518(24.1)	246(7.1)	86(6.5)
三野郷	15,122(5.5)	716(5.0)	143(6.7)	163(4.7)	58(4.4)
高　安	32,036(11.6)	1,050(7.3)	115(5.4)	263(7.6)	438(33.4)
南高安	16,021(5.8)	384(2.7)	16(0.7)	125(3.6)	259(19.7)
曙　川	26,976(9.8)	857(5.9)	103(4.8)	205(5.9)	67(5.1)
志　紀	17,161(6.2)	1,040(7.2)	173(8.1)	234(6.8)	54(4.1)
(不詳)	103	0	0	0	0
総　数	275,638(100.0)	14,441(100.0)	2,147(100.0)	3,457(100.0)	1,313(100.0)

出所：八尾市『八尾市地域情報ファイル』2003年より、所属小学校区別に作成。
注：八尾市域別（合併前）の所属小学校区は以下の通り。

- 八尾　八尾小、用和小、安中小、高美小／長池小、美園小、高美南小／山本小、西山本小、南山本小
- 西郡　桂小
- 久宝寺　久宝寺小
- 龍華　龍華小、永畑小、亀井小、竹渕小
- 大正　大正小、大正北小
- 三野郷　北山本小／上之島小
- 高安　中高安小、北高安小、東山本小、高安西小
- 南高安　南高安小
- 曙川　曙川小、刑部小、曙川東小
- 志紀　志紀小

地区を中心とした地区である。歴史的にも行政的にも八尾市の中心をなし、人口、事業所数、商店数ともに圧倒的な比重を占めている。歴史的な経過や合併の経過を考慮すると、ここに久宝寺地区、西郡地区、三野郷地区を含めることができる。市役所が所在する八尾地区を中心としたこれらの地区は市街地区である。

第2は龍華地区である。地理的に大阪市（平野区）と接し、戦前から産業移転が継続し、人口、事業所数、工場数、商店数で市街地区に次ぐ比重を占めている。産業分布や地理的位置から、ここに大正地区、志紀地区、北若林地区を含めることができる。工場数では圧倒的比重を占め、中小企業を中心とした産業の一大集積地として形成されている。龍華地区を中心としたこれらの地区は工場地区である。

第3は高安地区である。人口も比較的多く、農家数はトップの比重を占めている。農家数の多さでは南高安地区も同様であり、合併の経過も含めて、ここに南高安地区、曙川地区を含めることができる。先にみた高燥斜面扇状地における花木・花卉の栽培や溜池の分布はこの地区においてであり、八尾市域の1特徴を示すものとなっている。高安地区を中心としたこれらの地区は農業地区である。

市街地区、工場地区、農業地区という性格の異なる地区が寄せ木細工のように併存している現状を、ここでは八尾市域のモザイク性としてとらえることにする。市域のモザイク性については、八尾市のなかである程度の共通認識があり、1980年代の前半には以下のように表現されていた（以下、八尾地域づくり研究会編1987より）。

- 八尾市は、「文字通りの『合併都市』で…（中略）…相互に繋がりのない分裂的な町」である。
- 「八尾は『モザイク模様』の町です。階層的に経済的な格差も大きいし、かくれた『高額所得者』もおられます。また高級住宅街から、文化長屋住宅街、旧村など、いろいろな性格をもっていますし、勤め人もいれば、自営業者もおられるわけです。」

市域のモザイク性が労働、所得、生活その他にどのような作用をもたらすことになるかは後に検討することにしたい。

大消費地への近接と依存

産業の移転と集積は八尾市域が大消費地に近接していることがその条件であった。そこで、次に、八尾市域がこれまでどのような政治経済的な位置に置かれてきたのか、歴史的に概括することにしたい（以下では棚橋利光1981を参照している）。

大和王権の時代、八尾市域を含む中河内地域は、ここで蘇我馬子と物部守屋（当時この地域に拠を構えた軍事氏族）の間で崇仏、排仏の権力闘争が展開されたように（物部氏が敗北）、3～4世紀初めにかけて成立した大和王権の1舞台であった。中河内地域には最大の前方後円墳、心合寺古墳（しおんじやまこふん）を初め多くの古墳

群が存在し、古くから発展した地域であり、大和王権の「難波・河内への新しい拠点づくり」の場であった。

これは高安城の建設にみられる。7世紀当時、中国の唐が朝鮮の高句麗を討伐しようとしていたもとで、高句麗は同じ朝鮮の百済と結びつきを強めた。日本は、百済、高句麗と友好的であり、唐によって降伏させられた百済からの援軍要請に応え、唐との間で白村江（はくすきのえ）の戦いが行われた。日本が大敗し、唐に対する防衛から、四国、九州などとともに、大和と河内の境界の生駒山系上に高安城が築かれたのである。

戦国時代には、久宝寺、八尾、萱振に寺内町が形成され、八尾市域に強固な政治的まとまりがみられた。この群雄割拠の時代、武士は浄土真宗（一向宗）その他の宗教勢力に依拠した。16世紀前半、近江大津の浄土真宗、近松山顕証寺の住持であった蓮淳（蓮如の第6子）が来住し、当時の久宝寺村にあった西証寺を顕証寺に改めた。大信寺と八尾村、恵光寺と萱振村とともに、寺内町は河内門徒衆の拠点となった。

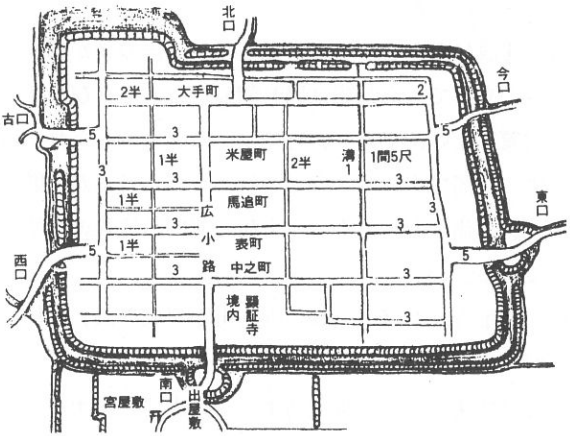
この時代の一時期、足利将軍の管領である細川春元の政権が形成されたが、その部下同士で新たな戦いが生じ、その一方の木沢長政が摂津大坂の石山本願寺（現在の大阪城付近）と河内地方で激しい戦争を展開した。石山本願寺の傘下に久宝寺寺内町が形成されたのはこの時期である。寺内町は、浄土真宗寺院を中心に土塁や堀をめぐらして防衛体制をとってつくられた町（村）であり、京都の山科、大坂の石山、富田林、貝塚などにもみられる。

寺内町は、環濠をめぐらしたなかに商工業者を集め、戦国武将から諸公事（税）の免除などの権限を獲得し、群雄割拠のもとで形成された一種の独立王国である。図1-6は江戸時代中期（18世紀）に作成された久宝寺寺内町古図である。久宝寺村で精神的な支柱となった顕証寺を中心として、堀と土塁で囲まれた村がつくられ、そのなかである程度独立した生活が営まれた。

しかし、江戸時代になると、地域や農民がまとまり団結することを弱める支配体制が徹底された。大坂全域でみられた入組み支配がそれである。

これは、村ごとに領主を変えること、1つの村を複数の領主に分けもすること、領主に関しては大名領と江戸幕府領（天領または御領）を入り組ませ、そ

図1-6　久宝寺寺内町図



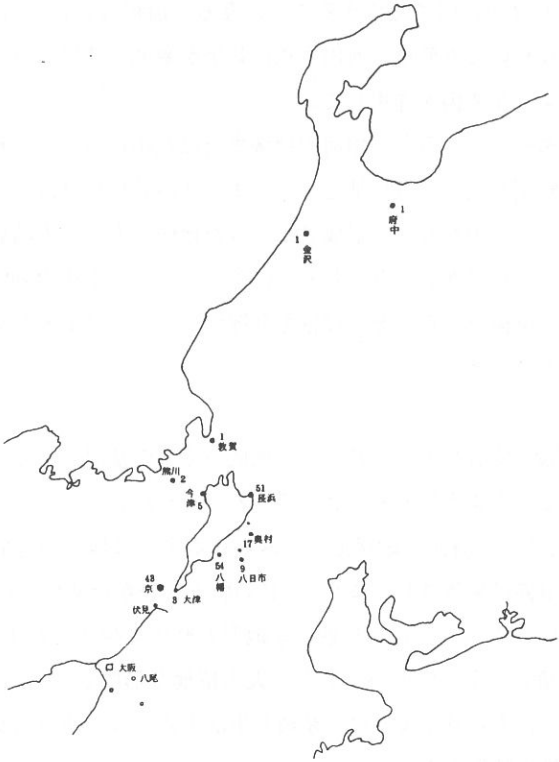
出所：棚橋利光『八尾・柏原の歴史』松頼社、1981年、p.139「久宝寺寺内図」を借用。久宝寺寺内図（享保８年、新検分間正絵図より）西尾重治氏作図
注：図中の数値は道路の幅を表示。

こに寺社領や公家領をはめ込むこと、といった特徴をもつ。大坂のような「生産力の高い地域で大名が大きな経済力を握らず、農民たちにも団結の力を与えない」ための支配の方法であった。この結果、八尾市域は政治から切り離され、「商人や農民たちの庶民の町」となった。

この「庶民の町」を示すのが当時の農業での河内木綿の栽培である。前述したように、1704年に大和川が付け替えられ、旧大和川流域で開発された新田で河内木綿の作付面積が飛躍的に増大した。大坂は大消費地で綿市場があり、在郷村にも木綿問屋がつくられていた。八尾・柏原地域には八尾組、久宝寺組、山の根き組の３組合があり、組合員は、八尾組でみると11村にわたり総数76人にのぼっていた。

河内木綿の生産と販売をめぐる特徴は次のような点にあった。まず生産では、農村労働力の活用がその土台となっていたということである。糸に紡ぐことを除いて、その大部分が実綿（みわた）として仲買人に販売された。また木綿も染色はなく、そのほとんどが白木綿（しろもめん）のままに販売された。この意味で、河内木綿は「農家の副業」の域を出なかったのである。

図1-7　八尾綿吉店の木綿販路図（江戸時代中期）



出所：棚橋利光『河内木綿の販路』八尾市史編さん室、1974年、p.29「第1図」を借用。
注：地名に付された数値はその地域における取引先数。

次に販売先では、大坂はもとよりであるが、とりわけ八幡や長浜などの近江地方が目立っていることである。図1-7は、江戸時代中期（18世紀半ば）における、取引の大きかった八尾市域の1問屋、仲買店の木綿販路図である。販売は「近江八幡を中心とした近江商人の活動」に依拠していたということである。農家の副業としては大規模なものであったが、農村労働力に依拠し、生産から販売にわたる経営基盤は必ずしも強固なものではなかったといえる。

河内木綿の生産、販売においては、実綿や白木綿での生産や販売で近江商人に依拠していたことにみられるように、「品質向上・商品管理」で弱さを抱えていた。それは大消費地が近接して存在し、商品作物として栽培することが可

能であるという条件の上に成り立っていたからであり、その反面では経済状況の変化に対する対応に弱さを抱えることになる。前掲表1-1において、綿花の自由化直後になぜいとも簡単に河内木綿の栽培が激減し壊滅したのか、という事情にはこのような要因が作用している。

歴史的な経過としてみると、中河内地域または八尾市域は、大和政権の延長地域であり、戦国時代の１戦場地となり、また江戸時代には政治から切り離された庶民の町として歩むなかで形成されてきた地域である。大消費地に近接した条件を活用する点は顕著にみられるが、その一方で、中央の動向と関連させた地域としての位置をとらえその役割を発揮するという歴史的経験は少ない地域である、とみることができる。

これまで概観してきた地域の特徴を、地域づくりの基礎である経済的文化的資源との関連でどのようにみることができるだろうか。

八尾市域は、「高燥斜面の扇状地」にみられるように地形的特徴が大であり、この地域の古墳群に象徴されるように、長い歴史と豊かな文化が存在する。「都市と田舎」というよりも、むしろ独自な地形と歴史を抱えた都市である。「産業の移転・集積」によって中小企業の一大集積地が形成されているが、「市域のモザイク性」にみられるように、産業と生活をめぐって新旧面が混在し、比較的高い流動性に特徴がある。

八尾市域の特徴を簡潔に表現すれば、それは、地形・生活・文化での新旧性と産業・生活での流動性にあるといえるであろう。「大消費地への近接と依存」という条件を考えれば、地域生活のネットワーク化は１つの課題となる。地域の経済的文化的資源には豊かなものがあるが、ここには新旧性と流動性が刻印されている。この新旧性および流動性を活かしながら、地域としての「まとまり」あるいは役割をどのように発揮するかが八尾市域の生活におけるネットワーク化の歴史的社会的な課題である（これらの点は後の検討対象である）。

文献と資料（主に単行本）

〈地域づくり〉
- 山脇悦司『ざっくばらん』「ざっくばらん」出版委員会、1978年
- 八尾地域づくり研究会編『フリースタンディング・シティ八尾』1987年
- 山脇悦司『市政はバランス感覚』ぎょうせい、1989年
- 八尾まちづくり研究会編『住みなれたまちで安心して暮らしたい』総合社会福祉研究所、1993年
- 山脇悦司『地方分権をもとめて』たる出版、1994年
- 成瀬龍夫『くらしの公共性と地方自治』自治体研究社、1994年
- 八尾の個性・魅力を考える懇話会『八尾の個性と魅力』八尾市企画調整部、1999年
- 八尾市財政問題研究会ほか『竜華操車場跡地開発と八尾市財政を考える』1999年
- 八尾市『八尾市総合計画　やお未来・元気プラン21』2001年
- 大阪経済法科大学経済研究所編『八尾まちづくり・シンポジウム』2001～2004年
- 八尾地域研究会編『八尾の地域づくり』シィーム出版、2007年
- 八尾市企画財政部地域経営課『やお未来』2007年（以降、雑誌）
- 高垣匡徃「久宝寺寺内町の歴史を生かしたまちづくり」『地域総合研究所紀要』大阪経済法科大学地域総合研究所、第３号、2010年（講演）
- 財団法人地方自治研究機構ほか『八尾市における地域分権の推進に関する調査研究』2010年（報告書）
- 八尾市『やお総合計画2020～元気をつなぐまち、新しい河内の八尾～』2011年
- 八尾まちづくり研究会『きずなと自治がいきづくまち・八尾』2011年

〈地理、歴史〉
- 三栖　元編『河内史談』全３巻（輯）、東大阪新聞社、1951～53年
- 今　東光『弓削道鏡』文芸春秋、1960年（小説）
- 藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』日本科学社、1961年
- 藤岡謙二郎　『日本の都市 その特質と地域的問題点』大明堂、1968年
- 宮本又次編『大阪の歴史と風土』毎日放送、1973年
- やお文化協会『河内どんこう』1976年（以降、雑誌）
- 今　東光『小説河内風土記』全6巻、東邦出版社、1977年（小説）
- 沢井浩三『八尾の歴史（「八尾市史紀要」第3号）』八尾市教育委員会、1978年
- 棚橋利光『八尾・柏原の歴史』松籟社、1981年
- 八尾市史編集委員会編『八尾市史（近代）本文編』1983年
- 大阪府農業会議編『大阪府農業史』大阪府農業会議、1984年
- 北崎豊二監修『市民のための八尾の歴史』八尾市立図書館、1986年
- 八尾市教育委員会『寺内町の基本計画に関する研究』1988年（報告書）
- 三谷秀治『小説 河内義民伝』新日本出版社、1989年
- 森田康夫ほか『八尾座の歴史』解放出版、1989年
- 村川行弘、小林博編著『河内地域史』大阪経済法科大学出版部、1991年
- 黒岩重吾『磐船の光芒』上、下、講談社文庫、1993年（小説）
- 鶴田正人『河内山本物語』西川書店、1997年

- 森田康夫『河内　社会・文化・医療』和泉書院、2001年
- 中　九兵衛『甚兵衛と大和川』大阪書籍、2004年
- 山口之夫『河内木綿と大和川』清文堂、2007年
- 大和川水系ミュージアムネットワーク編『大和川付け替え三〇〇年』雄山閣、2007年
- 川内眷三「八尾市生駒山西麓扇状地面における小溜池群の灌漑様式の類型化と地域考察」『四天王寺国際仏教大学紀要』第45号、2008年
- 齊藤恍三「高安山山麓の環境と里山保全」八尾市教育委員会編『高安千塚シンポジウム資料集』2009年

〈産業〉
- 武部善人『河内木綿の研究』八尾郷土史料刊行会、1957年
- 武部善人『近郊農村の分解と産業資本』御茶の水書房、1962年
- 棚橋利光『河内木綿の販路（「八尾市史紀要」第４号）』八尾市史編さん室、1974年
- 武部善人『河内木綿史』吉川弘文館、1981年
- 八尾まちづくり研究会『八尾市農業とまちづくりに関する提言』1989年
- 山中　進『農村地域の工業化』大明堂、1991年
- 近畿大学商経学部・関西経済研究会編『地域経済と企業家精神』1995年
- 武知京三『近代日本と地域産業』税務経理協会、1998年
- 大阪府中小企業家同友会ほか編『八尾地域産業調査報告書』1998年
- 八尾市編『八尾市製造業に関する実態調査報告書』1999年
- 植田浩史編『産業集積と中小企業』創風社、2000年
- 八尾商工会議所『八尾市における工業集積の実態把握及びネットワークづくりに関する調査研究 報告書』2001年
- 八尾商工会議所『八尾の商工業』八尾市市民産業部、2001年
- 植田浩史『自治体の地域産業政策と中小企業振興基本条例』自治体研究社、2007年
- 日刊工業新聞社編『大阪・八尾発50年後も輝く中小企業』日刊工業新聞社、2008年
- 八尾市編『八尾市商業調査報告書』2009年（八尾市ホームページ〈環境経済部・産業政策課〉）
- 中村尊裕「異業種交流グループにおけるイノベーション促進」『地域総合研究所紀要』大阪経済法科大学地域総合研究所、第３号、2010年

〈環境〉
- 岩城本臣『八尾市久宝寺における企業環境権訴訟の軌跡』精文社、1990年
- 愛宕トラスト市民協議会『高安山の自然』1994年（以降、冊子）
- 恩智川環境ネットワーク会議『恩智川パートナーシップ』1998年（以降、冊子）
- アクアフレンズ『アクアだより』1998年（以降、冊子）
- シンポジウム事務局『いきいき八尾環境フェスティバル・シンポジウム』2005年（以降）
- 八尾市環境保全課ほか『地球にいいことしたよ　八尾市立幼稚園、小・中学校、特別支援学校での環境配慮の取り組み集』2007年（以降、冊子）
- NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会編『生物多様性の維持と保全』大阪経済法科大学法学会、2009年
- 環境アニメイティッドやお編『八尾の再発見』2011年（冊子）

〈文化〉
• 辻合喜代太郎『河内木綿譜』全5巻、衣生活研究会、1965年
• 大阪民主新報社編『大阪の史跡を訪ねて』第１巻(原始古代編)ナンバー出版、1973年
• 八尾市総務部広聴課ほか『八尾の史跡』(改訂版)1987年
• 佐々木幹郎『河内望郷歌』五柳書院、1989年
• 村井市朗『河内の音頭いまむかし』八尾市市長広室、1994年
• 青木　薫　『おいしい八尾』1994年
• 八尾らしいすまいづくり編集委員会編『八尾らしいすまいづくり』八尾市建築部、1998年
• 青木　薫　『新・おいしい八尾』2008年
• 河内の郷土文化サークルセンター編『河内文化のおもちゃ箱』批評社、2009年

〈写真、マップ、絵本、その他〉
• 八尾市企画調整部自治推進課『八尾百景』1989年
•「八尾・柏原の100年」刊行会編『目で見る八尾・柏原の100年』郷土出版社、1995年
• 郷土出版社『八尾今昔写真帖』大阪教科書株式会社、2009年
• 八尾市環境部環境総務課『環境スケッチブック』1993年
• 八尾市生活排水アドバイザー『八尾生きものマップ』1996年
• 八尾市『八尾市内マップ＆紹介』2000年
• 八尾市郷土文化推進協議会『八尾の史跡散歩マップ』(新版) 2001年
• 八尾市企画調整部『八尾市コミュニティマップ』2003年
• 八尾市立民俗博物館編『八尾の至宝－八尾市指定文化財20周年記念』2011年（図録）
• “八尾の祭り”を楽しむわくわく実行委員会編『やおの祭まっぷ』各年版
• エコブック・ネット『パッカーくんをたすけるぞ』2004年（絵本）
• エコブック・ネット『キンタイくんのぼうけん』2006年（絵本）
• 八尾市市民活動支援ネットワークセンター「つどい」『つなぐ』2009年

〈地域づくり一般〉
• 安東誠一『地域経済改革の視点』中央経済社、1991年
• 松下圭一『自治体は変わるか』岩波新書、1999年
• 今井　照『新自治体の政策形成』学陽書房、2001年
• 日本政策投資銀行地域企画チーム編著『錦おりなす自立する地域』ぎょうせい、2002年
• 神野直彦『地域再生の経済学』中公新書、2002年
• 日本政策投資銀行地域企画チーム編著『地域再生の経営戦略』きんざい、2004年
• 大森　彌『まちづくり読本』ぎょうせい、2004年
• 岡田知弘『地域づくりの経済学入門』自治体研究社、2005年
• 鷲谷いづみ編『コウノトリの贈り物』地人書館、2007年
• 橋本卓爾・大泉英次編著『地域再生への挑戦』日本経済評論社、2008年
• ロバート・ペッカネン『日本における市民社会の二重構造』木鐸社、2008年
• 諸冨　徹『地域再生の新戦略』中央公論新社、2010年
• 橘川武郎、篠崎恵美子『地域再生　あなたが主役だ』日本経済評論、2010年